

## 内 容

### 巻頭言

### 第61回、第62回、第63回研究例会 報告

### 巻頭言

## IB（国際バカロレア）を学校体制・機構から見る

井嶋 悠（日韓・アジア教育文化センター）

千里国際学園（現関西学院千里国際）大阪インターナショナルスクール（OIS）で、日本側国語科教師ながら併設・協働校ゆえにできた日本語上級（Higher Level）11・12年生（高校2・3年生）の指導経験から、教育現場の体制・機構で気づかされた幾つかを雑感で記す。

教育課程の断続或いはそれぞれの課程での独善の弊害が、顕在して来たからこそ、中高一貫・中等教育構想・高大一貫・中高大一貫が評価されていると考えられる。そしてインター校ではそこに初等教育が、（更には幼児教育も）連関し、現場教員も管理職教員もまた保護者も、その体制でのIBであることを共有している。

更にはOISが、米国西部地域私立学校大学協会＝WASC（Western Association of Schools and Colleges）からの認定校であり、そこの教員であることに各教員は矜持・自尊を持っている一方で、当然のことながらWASCへの報告またWASCによる査察も定期的に行われ、管理職も含め解任、転任・退職勧告はごく当たり前に行われ、すべては次回の契約と関わって来る。それは校長権限の大きさとその裏返しである責任の大きさを示し、保護者の校長への学内教育実情に係る苦情、異議申し立ては実に厳しいものがあり、校長は学園全体の教育統括者としての力量が求められる。（私も、現場からの、保護者からの苦情申し立ての矢面に立たされた校長を何人か見ている。日本の比ではない。）

このような一つの目標実現に向けての連続した、しかも自尊ある体制があつてこそそのIB標榜であると思う。

しかもすべての教員は徹底した契約社会で、年度は9月始まりの6月終わり、7、8月は契約外、契約期間内でもクリスマス・年末年始休暇意識は強く、週5日制で、概ね3時か4時には校務を終え、後は個人裁量がほとんどで、そこには各教員の自負とIBという理念に向けての力量の自覚が見て取れる。

日本で今では総スカンの感さえある「総合学習」は、教科を越えた「横断的総合的学習」との呼称でも言われるが、教科の固執性（独善性）を打破しない限り絵に描いた餅であり、ましてや課程の断続現状ではなおさらで、閉鎖的、保身的で且つ権威指向的学校社会土壌にあつての校長と現場では、理想も言葉遊びに堕するしかないのではないかと自照自省から痛切に思う。

その理想の良し悪しは今措くとして、掲げた理想を現実化する体制・人の有機的組織が機能してこそ、IBは活きた命ある言葉、知識ではない智恵の言葉となるということであろう。